# スイス ツェルマット村を訪問して

議会だより特集号

## 町議会研修報告

偉大な自然をあくまで手を着ける事なくそのままにして、その懐で自然の中にくみこまれるように景観に配慮し、村人はプライドを持って生活をする。「スイスアルプスの女王」の求めに応じて景観に特化した、絵画のような美しい村である。

### 富士河口湖町議会国際交流事業（友好都市訪問交流）日程

実施目的：観光開発と環境整備の両立
実施時期：令和元年8月20日～令和元年8月25日
実施場所：スイス　ツェルマット
参加議員：10名

8月20日　出発　チューリッヒ滞在
8月21日　ピラトスを経てツェルマットへ
8月22日　富士河口湖町中学生によるプレゼンに参加
中学校長との意見交換、マッターホルンミュージアム、ヘリコプター会社、電気自動車工場、ツェルマット村内の景観について視察
8月23日　ゴルナーグラード鉄道、村営クルムホテル、リッフェルハウスホテルにて観光と環境整備の両立施策について視察
ツェルマット村関係者との交流会
8月24日　帰路
8月25日　帰国

## スイス、ツェルマットの景観の素晴らしさ

倉沢　鶴義　議員

富士河口湖町議会議員（国際交流事業友好都市交流訪問）４泊６日の研修で訪れたツェルマットの特徴をふまえて報告と感想をまとめてみた。

息を呑むほど素晴らしいマッターホルン（４４７８ｍ）とアルプスパノラマ、ガソリン車の走らないツェルマットの空気は極上そのものである。交通手段は徒歩、自転車、電気バス、または電気タクシー、３６５日確約された雪とスキー場の利用ができる。冬シーズンも夏シーズンも限りなき体験が楽しめる。村の中心部にある50軒以上のバーや１００軒以上のグルメレストラン、さらに山間にある50軒以上のレストランはハイクオリティの料理を提供している。上質で近代的な宿泊施設、１００以上のホテル（ベット数７０００以上）と１２００以上のホリデイアパート（ベット数約４０００）、伝統と文化を持つ昔から変わらない村の景観はスイスそのものである。

マッターホルンを見る、これは一生に一度は絶対に現地に行く価値のあるところである。ヨーロッパの標高のあるロープウェイ駅、最高に美しいハイキングトレイル、雪が確約されたスキーコース、数ある眺望抜群の展望台から、心地よい山のレストラン、最高級の料理とショッピング、これらの全てをガソリン車が走っていないこの村で体験ができ、アルピニスト、スキーヤー、ゆっくりと休暇を楽しむ人、自然を愛する人など様々な人が集まってくる他に類のない山麓の村である。

ツェルマットは（自然、景観、環境）すべてに配慮した村であることを実感した。私達、富士河口湖町議会にとって、今後の町づくりについて再認識された６日間の研修であった。

（編集のため加筆修正済み）

村営クルムホテル・ゴルナーグラート

## 地域経営組織 ブルガーゲマインデ・ツェルマット

堀内　昭登　議員

「ブルガーゲマインデ」とはドイツ語で市民のことを指し、スイスの各市町村における地域経営組織。役場のような行政機関ではなく住民主体の独自組織であり、強いて言えば住民自治経営組織のようなニュアンス。かつてスイスの山岳地方は貧しく満足に働ける場所は無かった。そこで住民同士が協力し、自分たちの持つ土地や資源を生かすことで新しい仕事を創り出し、地域全体を経営することを目的として組織化されていった。

観光リゾート地ツェルマットの経営において中心的役割を果たしているのが、「ブルガーゲマインデ・ツェルマット」である。行政機関の村役場の役割も大きいが、地域内の幅広い業種の意見を反映させ、役場と密接に連携することで地域経営を潤滑に機能させている。共有財産（山や森、牧草地）の維持管理だけでなく、地域全体の経済的な価値を高め、収益性を向上させている。組織は、「雇用創出」や「地域の稼ぐ力」を担う部門と、「公的・住民サービス」を担う部門とに分かれている。現在、山岳ホテル５軒、山のレストラン14軒、ショップ４軒等を経営している。それら全体で、３００ベッド、５５００席にのぼる。夏には２５０人、冬は３００人の雇用がある。売上は全体で３２００万スイスフラン（36億８千万円）キャッシュフロー５００万スイスフラン（５億７５００万円）で、財政的に安定している。また、地域の稼ぐ力を生み出すために、「マッターホルングループ」という１００％出資の会社を設立させている。そのほかにも、投資会社、索道事業（ロープウェイ等）、経理・経営サポート会社、ヘリコプター会社も経営している。

文化的事業としては、マッターホルンの描かれた絵を各地のオークションなどで競り落とし、地元で所有するようにしている。

今回の視察研修では、ツェルマットの先進的な観光地経営を学び、当町に必要とされる観光事業者の運営及び住民自治経営組織の活動内容等の調査を行うことができた。

（編集のため加筆修正済み）

ブルガーゲマインデの副社長クレメンツ氏（左）

## 成熟した景観美は自分達で作り自分達で守る

本庄　久　議員

長い行程の末たどり着いたツェルマットは、マッターホルンを携えて迎えてくれた。夕闇に佇む勇壮な山嶺は、村に繁栄をもたらしてきたことを誇り高く宣言しているようだった。ふと気づくと村全体がそれを祝している様相である。山と村が見事に調和しているのである。「これがツェルマットの景観美なのか」と、驚嘆の念に堪えない感動でツェルマットの初日が始まった。

まず、気がついたのは村の家々の作りである。どれも共通のテーマを持ち合わせていて、どこか山小屋の風情を感じさせる作りで統一され、落ち着いた雰囲気が村全体に醸し出されていた。統一された色、木材を基調とする建築様式、高さは約15メートル以下に押さえられ、景観にルールがあることが一目でわかった。住民がその規則をしっかりと守り、長い年月で育んできたのであろう。だが、地域住民の意思統一はそんなたやすいことでは無いのに、なぜここまで成し遂げられたのか。その背景にはやはりスイスの直接民主制があるとのことであった。皆で決め、皆で守る。この住民意識があってこそ、この景観美は完成されていったのである。家々の窓には花を生けた鉢が飾られてあり、村人の意識の高さが感じられた。

また、電線などは完全地中化、道路も自然石が使われていて、起伏のある地形に合った計画的な町並みは、年月をかけて作り上げられてきたのであろう。聞くところによると、新しく建てられる建物は建築計画が出た時点で周辺住民に公表され、必要であれば住民投票が行われるとのことである。成熟した景観美とは、地域住民の意識や、高い民度があってこそ、完成されていくものだと感じた。

観光で生きると決めたツェルマットは、何もかもが先端で、学びの多い研修ができた。このような機会に恵まれたので、是非、その成果を実践していきたいと強く心に決めた研修であった。

（編集のため加筆修正済み）

卓越した景観美

## スイス・ツェルマット　建築の構造

古屋　幹吉　議員

今回の工程の中、特に気になった建築物が2つある。

1つは、ルツェルンにあった大規模な建物で、屋根の出である庇を、日本ではあまり見ないほど長いキャンテにしてあり、その下を広場として開放し良い空間を形成している。

もう一つは、ツェルマットにあった5階建ての木積み（ログ）の建物で、これはまず日本では見ることはない。法的に許可されないからであろう。

では、なぜこれらがスイスでは可能なのか？

構造上影響するのは地震と積雪である。構造計算上この2つの要素は建築の形状に、多大な影響を与える。つまり建物の倒壊に関係するのである。

では、スイスの地震はどうなのか調べてみると、「過去100年以上に渡ってマグニチュード6以上の地震を経験していない国」「スイスではマグニチュード6以上の地震が過去800年間に5回程度しか起きておらず、身体に感じる有感地震自体も非常に少ない」との記述があった。とすると地震に対しては、ルツェルンの建物もツェルマットの5階建ても、計算上も経験的にも建築可能と判断したと考える。

もう一つの積雪はどうなのか。ルツェルンの降雪量は「2017年に1月16cm・2月20cm・3月8cm・12月15cm」との記録があり、構造上の負担は少ないと考え、構造計算の上で建築されたと考える。ツェルマットについては、「2017年に1月67cm・2月59cm・3月47cm・12月67cm」であり、この結果は多少構造上の負担になる。ツェルマットでは大きな庇はできないが、重さに耐えられる積層構造は残ってきたと考える。

（編集のため加筆修正済み）

ルツェルンの大規模な建物

ツェルマットの5階建ての木積建物

## 麓まで続く下水道で恵まれた環境を守る

梶原　義美　議員

ツェルマット村で、我々一向に随行してくれたのは地域共同体の役員であった。日本でいえば財産区の管理委員とでも言ったところであろうか。しかし、その実、日本の財産区とは比べられない程の組織であった。ホテルや山小屋を経営しているのである。

３１００ｍにある有名なゴルナーグラートホテルもその一つである。来客者の満足度が高いこのホテルは、１年を通して宿泊客が絶えることは無い。サービス内容も充実しているようだが、このような高地では、水に特段の配慮が無ければ、宿泊施設の運営はできない。実際どのようにしているのかを尋ねてみた。まず、上水道である。繁忙期には1日4万リットルを必要とする上水は、２５００ｍに位置するリッフェルハウスホテル（こちらも地域共同体が運営）からポンプアップしている。万が一故障したときには近くの池や貯水湖からも引いてきて濾過して使っている。下水道は麓のツェルマット村まで配管している。環境を保全するため、下水が地中に入ることが絶対に無いよう配慮している。上水道だけでなく、下水道にも社会インフラとしてしっかりと投資しているのである。それには理由があった。１９６３年、ツェルマットでは疫病が流行り、４００人が罹患し、3人が死亡した悲劇があった。それを教訓に、３１００ｍまでは下水道を確保しなければ宿泊施設はゲストを招いてはいけないという法律ができたそうである。地域共同体が多額の経費をかけてでも下水道を配備しているのは、このような背景のためである。このような姿勢は、ツェルマットのみならず、スイス全体にいえるとのことである。途中視察したピラトス山の山頂でも、下水道のマンホールを確認できた。やはり、観光産業に依存度の高いこの国では、環境を厳しい基準で守っていかなければならないということが良く理解できた。

日本でそのようなことがすぐにまねできるとは思わないが、ツェルマット村から学ぶことは、まだまだたくさんあるだろう。そのような意味でも、富士河口湖町とツェルマット村の交流は、今後も発展させていくことが大切であると考える。

（編集のため加筆修正済み）

麓まで続く下水道

## シューレ・ハウス・トリフト中学校を訪れて

中野　貴民　議員

生徒たちの交流の場に伺うことができた。富士河口湖町の生徒が3班に分かれ、「富士河口湖町が日本のどこにあるのか」「どのような環境で勉強し遊んでいるのか」などのテーマを、英語で説明していた。

次に、空手・習字・弓道・太鼓のバチの使い方をそれぞれ披露した。一つ一つにツェルマットの生徒達は興味を示していた。

太鼓本体は持っていくことが出来なかったので、披露することは出来なかったが、私のスマホに有った太鼓演奏の動画を見てもらい内容に好評を受けた。

訪問したツェルマットの中学校は、全8クラス生徒数１６５名。その内スイス人は半数で残りは外国人である。校庭は無く、体育の授業は体育館で行うようだった。職員室はまるでホテルのロビーの様だった。生徒達や先生も服装や容姿がとてもラフで自由な感じを受けた。

中学校卒業後は全員高校に行くわけではなく、60％の生徒が専門学校に進学し、週5日間のうち4日間は仕事に就いているとのこと。

そこで、ツェルマットの中学校の生徒は、在学中にツェルマットにある事業所（ホテル・お店・カフェ・バー）で、今後の就職に備え仕事体験をし、自分に合う仕事を見つけるそうだ。卒業後、就職して仕事を辞める人はほとんどいない。在学中に自分に合った仕事を見つけるシステムは、その後の進路や人生設計に役立つということがよくわかった。

中学生の同行を伴う今回の視察は、若い子たちの目線での意見を聞くことが出来、私自身も前回とまた違った目線で様々なものを見て、感じることが出来た。

これから富士河口湖町の町民の皆様にも、ツェルマットの魅力を伝えていき、訪れて頂きたいと思う。

（編集のため加筆修正済み）

生徒達の交流

## 「富士山登山鉄道構想」より前にある想い

渡辺　武則　議員

9月12日に富士山登山鉄道構想検討会第2回理事会が開催され、国内外の先進事例として今回視察のゴルナーグラート鉄道も紹介されたが、今回の視察で「富士山登山鉄道構想」に対する私の考えは一転した。スイスの山々は古代からの大陸移動と隆起、氷河によって形成されたものだが、富士山は活火山である。「富士山登山鉄道構想」には景観保全と安全面からしても慎重な議論が必要で、電気や水素を燃料とした自然に優しい高馬力のバスを開発し、既存のスバルラインと吉田口登山道を改良して大型ラッセル車を上下線に常設し、県営駐車場から反時計回りで五合目まで往復するルートを提案する。富士山登山鉄道以上にスイスの山岳ホテルにおけるライフラインの整備と環境保全は見習いたいものである。

ツェルマットは世界のDMO（観光地域づくり）の先進地である。観光立町・富士河口湖町が2020東京オリンピック後も、国内外のリピーターをいかに増やして行くか、観光庁の勧める「日本版DMOの形成促進」を検討する必要があると思う。ツェルマットは30年50年先を見据えている。

これは私の夢物語だが、富士宮市と結んでいる「富士山西麓観光連絡協議会」をもとに富士宮市・鳴沢村と広域連盟でDMOを構成。東側の大月線に対し、西富士宮から本栖湖に鉄道をつなぎ車窓からの富士山を満喫していただく。北山ワイン、井之頭の虹鱒、朝霧高原・富士ヶ嶺の乳製品と豚・牛肉、本栖のジビエ、西湖のヒメマス、鳴沢村や富士河口湖町の高原野菜をブランド化して世界のお客様をもてなし、30年後には富士河口湖町の観光拠点を河口湖と町西部の2極化にできれば・・・・・。

朝霧高原〝ふもとっぱら〟をのんびり走る電車の車窓から見る富士山を想像してみていただきたい。富士山もマッターホルンも、麓から見るのが一番美しいのである。

（編集のため加筆修正済み）

1898 年開業のゴルナーグラート鉄道

## 訪れた人に好印象を与える電気自動車

半田　幸久　議員

ツェルマットに着くと、まずその静けさに驚いた。通りでは、モーターの音だけが響き、メイン通りでもエンジン音が全く聞こえない。喧噪な日本と違い、まさに別世界である。村中の狭い道を、観光客を乗せた色とりどりの電気自動車が、小気味よく走り抜けていく。その風情だけでも、この村に訪れた人々をエコの世界に導いてくれているようだ。自然を守っていくというツェルマット村の姿勢に好感を持てた。

ツェルマットの電気自動車は従業員10人ほどの小さな工場で生産されている。工場長が忙しい手を休め、丁寧に解説をしてくれた。ツェルマットは歴史的にガソリン車が走ったことがほとんどない。ここまで来る道自体が狭いからで、かつて村中では馬車が走り、それが長く主な交通手段であった。「馬を働かせるのは如何なものか？」という動物愛護の考えと、狭い土地での道路の拡張が難しいことが主因となって、電気自動車への移行となり、ついに1977年に住民投票で電気自動車化が正式に可決されたとのことである。なんと、環境保全の発想というより、動物愛護の考えから生まれたのが、ここのカーフリー政策であった。

現在、車両の高さ、幅、長さの寸法は規則で決まっている。原動機のエネルギーはリチウムバッテリー発電充電機。既成の部品などが無いため、全て手作りで生産しなければならず、製造期間は3，4ヶ月に及ぶ。注文も現在8，9ヶ月待ちである。このように時間と経費がかかるので、販売価格が1000万円になるという。車両の使用許可は村が決めたもののみで、個人所有はなく、全てビジネス用だという。タクシー、ホテル送迎、運搬等が主であるが、2平方キロに満たない小さな村中に現在500台以上の車両が許可を得ている。

環境に配慮したまちづくりはそれだけでも好印象を与える。ワンランク上の観光地を目指す我が町も、できればそんな時代を迎えてみたいものである。

（編集のため加筆修正済み）

電気自動車工場にて

## エアーツェルマット50周年（山岳ヘリ）

渡辺　英之　議員

１９６８年会社設立、12名～14名全員が社員ではなく、フリーパイロットも活動している。それほど大きな会社ではないが、ツェルマットの地形的にみると、重要な会社であることがわかる。主に遊覧飛行、資材等の荷上げ、タクシーの役割、山岳救助に至っては出動率25％ヘリコプター、10機のうち３機が救助専門で活動している。24時間体制で、30分以内に飛び立つ体制をとっている。夜間飛行も照明をつけて、どんな天候でも、どんな時間帯でも飛行する準備はできていて、必ず緊急の医者が駐在している。その中でも麻酔の技術を持っている医者が一番重要とされている。出動の際は、パイロット、医者、登山ガイド、三人が同乗している。プロの登山ガイドは10分以内で到着できる位置に待機している。軽症者は10分でフィスクにある病院のヘリポートへ搬送、重傷者はベルン、ローザンヌ、チューリッヒまで搬送している。７０００ｍを飛ぶには機体は軽量化しなければならず、椅子のシート、ドアも外すとのこと。ヘリの運用は、スイスでは半官半民、フランスとイタリアは国の運用。山岳の知識を持っていなければ仕事はできないとのことである。

また、ホテルの研修では、世界一の急勾配ピラトゥス鉄道で山岳ホテルピラトゥクルムの視察、ツェルマットでは、ゴルナーグラート鉄道で標高３１３０ｍゴルナーグラート展望台に立つクルムホテルゴルナーグラート、少し下ったところにある村営リュフェルハウスも視察を行った。どのホテルも環境に優しく、下水道も麓まで繋がっていた。稼働率もよく、予約も90％一年間埋まっているとのこと。７月から８月は１００％予約が入っていて予約が入りにくいようだ。料金は一泊２４５フラン、日本円で三万円弱。ホテルの内部も詳しく説明をうけたが、環境面、衛生面、搬入搬出、ごみの選別がすべて効率よく運営されていた。

今回の研修を受けて富士河口湖町また富士山世界遺産の環境整備のための勉強の糧にしていきたいと思う。

（編集のため加筆修正済み）

救助から帰還したヘリコプター前にて

## 人口減少対策を成し得た観光と教育

外川　満　議員

スイスにも少子化問題や人口減少問題があり、ツェルマット村では地元民だけでは、観光産業を維持できない状況である。現在、外国人を積極的に受け入れ、人口の約４割が外国人である。そのような状況の下、外資に権益を奪われることなく、外からの労働力を補っているのがツェルマットである。

### 一．村の観光を支える２大組織

ツェルマット村の観光産業が完成度の高いものと言われる所以に、以下の２大組織の連携があるといわれる。地域の権益を守ったうえで、伝統を重んじ、時流に合った観光施策を打ち出している。我が国のＤＭＯ戦略の手本としてよく参考とされている。

**●ブルガーゲマインデ**

４００年以上の歴史のある地域共同体組織で、地域の権益を守っている。外資が入り込むことに非常に慎重で、例えば、家が売られてホテル新設の計画が上がると、外資系が入る前に地元の人間でできないかを協議する。

**●ツェルマット観光局**

この村の観光戦略の司令塔である。マーケティングを行い、戦略策定、プロモーション事業を展開している。観光施策は行政が行うのではなく、観光局が進めている。その下支えになっているのが、前述のブルガーゲマインデであり、その結果、地域に根ざした観光が具現化されている。

### 二．教育現場

**●国籍多様な生徒**

訪問したツェルマット中学校は、生徒数１６５名のうち、スイス人は半数で残りは外国人。言語の問題はあるが、子供の頃からマルチカルチャーの中で育つことは、将来の糧になるとのこと。

**●印象的だった校長の言葉**

「全員が公平な形で恩恵が受けられるのが校長の仕事。マッターホルンのような高みを目指している。モットーは伝統を重んじること。観光で潤ったのはこの百年。この恩恵を忘れず、感謝の念を忘れないよう指導していきたい。」とのこと。多様性への対応がしっかりと意識され、地域に根ざし、未来を見据えた教育者であった。

### 三．まとめ

村での観光は、地元民の権益をしっかり守るシステムが完成されていた。尚且つ、外部からの労働力の確保も抜け目がなく、そのための教育環境整備も観光で得た収益をもとに充実させている。最近、村に戻ってきている人が増えてきているとのこと。地元に希望があり、地元住民の優位性を保っているこの村は、出て行った若者を呼び戻し、今後も長く繁栄していくであろう。見習うべきことが多い研修であった。

（編集のため加筆修正済み）

# ツェルマット村長
# ロミー・ビーナー=ハウザー氏からの手紙

今回の視察研修では、村長をはじめ、多くの村の要人の方々にご助力を賜りました。友好都市として手厚いおもてなしを頂き、訪問団一同、感謝の念に堪えません。

特集号発行にあわせ、ツェルマット村長に寄稿をお願いしましたところ、以下のお便りをいただきました。

数年前より富士河口湖町とツェルマットの友好提携が始まりました。そして２０１９年８月に、中学生と町議会代表者からなる訪問団をツェルマットで受け入れさせていただきました。

子供たちが学校を訪問し、地元の家族のお宅に民泊をしている間、町議会代表者の方々はツェルマット村に関する研修をされました。

観光、教育、サステナビリティ、経済といったテーマに沿って熱心に取り組まれ、学校訪問のほかにもエア・ツェルマットやスティンポ電気自動車製造工場といった地元企業も視察されました。

また、ゴルナーグラート展望台では快晴の中、唯一無二の山岳パノラマ風景を楽しみ、昼食会や夕食会では国を超えた地元の代表者たちとの意見交換も行っていただきました。

富士河口湖町訪問団の方々をツェルマットで受け入れられましたことを、私たちは誇りに思い、次回の交流を今から心待ちにしております。

ツェルマット村長
ロミー・ビーナー=ハウザー

出発の朝、早朝にもかかわらず見送りに来てくださった村長と、大変お世話になった教育担当議員のマルセルさん（左から２人目）

# ツェルマット村と富士河口湖町

## 友好の歴史

2015年　7月：富士河口湖町の渡邊凱保・前町長はアルプス訪問
2015年11月：ツェルマットと富士河口湖町の友好協定成立
2015年11月：友好協定締結を記念してツェルマットがカウベルを贈呈
2016年　7月：渡辺喜久男町長が提携を示す記念碑の除幕式に出席
2016年　9月：ツェルマットのクリストフ・ビュルギン前村長が富士河口湖町を訪問
2017年　8月：富士河口湖町の青少年がツェルマットを訪問
2018年　5月：ツェルマットの公式訪問団と青少年が富士河口湖町を訪問

2016年に設置された記念碑（モニュメント）

## 比　較

ツェルマット村

| ツェルマット村 | | 富士河口湖町 |
|---|---|---|
| 1640メートル | 標　高 | 857メートル（河口湖駅） |
| 242.7㎢（そのうち居住区は0.7%） | 面　積 | 158.40㎢ |
| 約5,600人 | 人　口 | 26,657人 |
| マッターホルン　4,478メートル | 山 | 富士山　3,776メートル |
| 2,087,944人（2017年） | 年間観光客数 | 4,585,663人（2017年） |
| 82.9歳（2016年） | 平均寿命 | 84.5歳（2015年） |

富士河口湖町

## 友好都市紹介

### ツェルマット（Zermatt）

国名・州名　スイス連邦、ヴァリス州
主要言語　ドイツ語

## 特集号編集後記

### 富士河口湖町議会議員研修

令和元年8月20日から4泊6日でスイス共和国ツェルマット村を議員10名で視察研修を行いました。出発に先立ち、町役場にて㈱スペースタイムネットさんより、スイス全般、現状、気候、産業、観光について詳しく説明を受けました。また8月8日にはスイス大使館を訪問し、スイスの多様性に関して講義を受けました。この2つの事前研修で授かった知識が、現地での研修に大いに役立つこととなりました。ツェルマット村滞在中は内容もスケジュールも大変充実した研修を行うことができ、また中学生交流プログラムにも参加できました。これは、現地の関係各位のご厚情によるもので、感謝の念に堪えません。

今回の特集号は、議会広報常任委員会で編集しております。議員の研修内容は、各自レポートに詳しくまとめられており、今回の特集号でその一部を8ページに集約して町民の皆様に報告致します。

クリストフ・ビュルギン前村長と渡辺喜久男町長の名前が刻まれている記念石碑には、大変感動致しました。記念碑から見渡す山並み、街並みを、未来永劫守ってほしいものだと感じました。

議会広報常任委員会
委員長　渡辺　英之

議会だより特集号　町議会研修報告
スイスツェルマット村を訪問して

発行：富士河口湖町議会　編集：議会広報常任委員会
〒401−0392 富士河口湖町船津1700　TEL 0555-72-3167